

マルコス時代を歴史として構成し直すことは、同時代人のフィリピン研究者にとって長い間の宿題であった。本書に何かの意味があるとすれば、それは今までのマルコス理解、「二月革命」理解、したがってアキノ理解に対して、ささやかな異説を提起したことであろう。

筆者は本書をまとめる上で、参看できた内外の先学、同学の研究成果に多くを負っている。しかし本書が扱った期間のフィリピンの情勢展開に筋道をつけることは、アジア経済研究所における一九六〇年代以来の動向分析事業に従事してフィリピンはじめ内外の新聞を継続してスキャン（走査）することが土台にあって可能となった。その過程で重要な事実を見落したり、事態を見誤ったことももちろん多々あったが、当初から特定の学説による枠組みにもとづいて先験的に評価をくだすことの弊からは何とか免れたのではないかと考えている。

動向分析事業ではその時々々の分析成果を、アジア各国をほぼ網羅した月刊『アジアの動向』、『アジア動向年報』、そして季刊『アジアトレンド』、不定期の「動向分析資料」などの刊行物で発表してきた。本書はフィリピンに関するそれらの成果を集大成する形でそのまま利用している。フィリピンの一九八〇年代については、部内任務分担上、ほぼ前半を福島光丘、後半を野沢勝美

と、二人の同僚が受持ってまとめたものを利用してもらった。両氏は、内容上の適切な助言、原稿の忍耐づよい閲読、必要資料の収集などの面でも援助を惜しまれなかった。深く感謝する。フィリピン情勢、そして広く世界情勢を見る視点を定めるうえで、動向分析部内での制度的、非制度的な議論の場が役立っている。特に今回は「アジア現代史の諸問題」研究会で協働することができた。同僚たちとの交流を心からありがたいと思う。

筆者は執筆の際、所外の若干の刊行物に発表したものをそのまま取り入れて使用している。特に岩波書店『世界』に発表した論文（一九六九年一二月、七三年九月、七五年五月、八三年一月の各号）を利用することにつき、同誌編集部から快諾をいただいたことに感謝する。

フィリピン共和国ケソン市にある大衆民主主義研究所（IPD）は、未公刊の資料「ポリティカル・クラン」から引用することを許された。その寛大さに感謝する。

「アジア現代史の諸問題」研究会からは一九八九年九月一〇月、フィリピン、アメリカ、カナダにおける現地調査の機会を与えられた。その折、それら各国の研究者から種々の重要な示唆を得たことは貴重であった。また比米関係当事者との会見を斡旋されたワシントンのUSIS、東京のアメリカン・センターの関係者の皆さんに感謝する。

最後になったが、長年カウンターパートとして協働してきたアジア経済出版会編集部には、今回もまた大変お世話になった。その献身とご労苦に対して深い感謝を捧げるものである。

一九九一年八月

筆者